

ヨリミチ部 2025 年 6 月 19 日 ゲストトーク セッションレポート
テーマ: ちゃんと学んでる? 学校では学べないリーダの学び方

マインドから再構築する“学び”の在り方 AI 時代を超えて、“ひと”に必要な学ぶとは?

2025/06/20

編集

渋谷 健 / 一般社団法人 Creative Guild

スピーカー

リー・ジーン / オムニイングリッシュ

小林 拓真 / 一般社団法人高校生みらいラボ

中川 早智子 / 株式会社サステナブルエデュケーション

*本レポートは、トークセッションの記録と、参加者からオンラインフォームを通じて寄せられたコメントに基づき、ChatGPT によって作成されました。

“楽しく学ぶ”ことは、生き抜く力を養う核心である

AI の加速度的な進化、不確実性と複雑性が絡み合う社会情勢、そして人生 100 年時代と呼ばれる長寿化——私たちを取り巻く環境は劇的な転換期にある。これまでの「正解を覚える学び」ではなく、自ら問いを立て、失敗から学び、他者と協働しながら探究していく「生きる力としての学び」が問われている。

本レポートは、「これからの時代を一人ひとりが“楽しく”生きるために必要な学び方」をテーマに行われたワークショップの対話と参加者の意見をもとに、多面的な分析と構造化を行い、現代の学びのあり方を再定義することを目的としている。

とくに注目すべきは、「学び＝苦行」「学び＝成果主義」といった固定観念を超えて、“楽しい”を起点とした内発的動機づけによる自律的な学びの在り方を探る姿勢である。ここでいう「楽しい」とは、単なる娯楽ではなく、「好奇心」「探究心」「納得感」に裏打ちされた、深い充足を伴う能動的行動である。

以下、本レポートは5つのステップに分けて展開する。

- STEP1 では、「この時代に本当に必要な学びとは何か？」を定義する。
- STEP2 では、「学びを阻む壁とその根因」を掘り下げる。
- STEP3 では、「学びを武器にした先に描ける未来像」を構想する。
- STEP4 では、「変化の激しい時代において有効な学びの戦略」を整理する。
- STEP5 では、「個々人がどこから、どのように始めればよいか」を探究する。

本稿は、教育・経営・子育て・リスクリングといった多様な文脈に適応可能な示唆を含んでおり、「人間が楽しく、しなやかに生きるための学びの技法」としての道筋を示すものである。

目次

【1】 この時代に本当に必要な学びとは何か？	3
【2】 どんな学びの壁がいまあるのか？	5
【3】 もし学びを武器にできたら、どんな未来が可能なのか？	7
【4】 この変化の激しい時代に、どうやって学ぶべきか？	9
【5】 そしてどこから始めるか？	11
【6】 さいごに：「楽しい学び」は義務ではなく、未来への権利である	13

【1】この時代に本当に必要な学びとは何か？

“正解”より“問い”を育てる力、“知識”より“意味づけ”の力

現代社会は、「知っていること」よりも「どう意味づけ、どう使うか」が問われる時代へとシフトしている。変化が常態化し、AIが膨大な情報を瞬時に処理する中で、人間に求められる学びは「再現性の高いスキル」から、「再定義力」「越境力」「共感力」へと移行している。

とくに浮かび上がったのは、“楽しく生きるための学び”に必要な要素が、以下のような4つの軸で構成されるという洞察である。

1. 探究する力：好奇心と問いを持続させる

- ・ 単なる知識習得ではなく、「なぜ？」と問い続ける力。
- ・ 学びの起点を「正解」ではなく「違和感」や「問い」に置くことが鍵。
- ・ たとえば、「Limitless」などの推薦書籍にも見られるように、学びとは自らの潜在能力にアクセスする営みである。

2. AIと共に学ぶ力：プロンプト・メタ認知・編集力

- ・ 今や知識の取得はAIと分担できる。求められるのは「問いの設計」「出力の編集」「思考の再構築」。
- ・ 自分の感情や関心に気づきながら、AIと対話するためのメタ認知が中心スキルとなる。
- ・ プロンプト＝思考の触媒ととらえることが、未来の学びの基本となる。

3. 越境する力：他者の視点に立ち、共創する

- ・ 言語・文化・価値観の違いを越えて対話できる力（とくに英語や非言語的表現を含むコミュニケーション）。
- ・ 多様な人と協働するには、「違いを恐れない好奇心」が不可欠。
- ・ 教育だけでなく、地域社会・職場・家庭などあらゆる場でこの力が求められている。

4. 自分を生きる力：内省・選択・意味づけ

- ・ 自分が何者で、どんな状態が「楽しい」のかを知る力。
- ・ 学びとは「情報の受容」ではなく、「自分の人生との接続」である。
- ・ ウェルビーイング・ライフデザインの視点から「学ぶ意味」そのものを再定義する必要がある。

● 経験→意味づけ→対話→実践→内省 の循環

- この時代の学びは、「体験を言葉にし、他者と共有し、実践を通じて再定義する」プロセスで深化する。
- 教室内の知識インプットではなく、場に根ざした「循環型ラーニング」が重要である。

【2】どんな学びの壁がいまあるのか？

“知りたい”と“学べない”のあいだに潜む、目に見えない障壁たち

参加者の対話と意見から浮かび上がったのは、「学びたい」と感じていても、実際に学ぶことを妨げる複合的な“壁”の存在である。それは単に個人の努力不足ではなく、構造的・文化的・心理的な要因が絡み合った「見えづらい壁」である。

以下では、壁を4つの層に分けて整理する。

1. 個人の制約：時間・資金・環境

- ・ 「時間がない」「お金がかかる」「日常が忙しすぎる」といった現実的制約。
- ・ 特に子育てや仕事との両立に悩む親世代は、「ライフのための学び」へのシフトの必要性を感じつつも、容易ではないと述べていた。
- ・ また、「学びたいが、どこから始めていいか分からない」という“初動のハードル”も存在する。

2. 社会文化的壁：正解主義・減点文化・失敗忌避

- ・ 「失敗＝恥」という価値観が根深く残る日本社会において、「わからない」と言うこと自体が避けられがち。
- ・ 教室では“正解を出すこと”が評価され、「問いを立てる」ことはむしろ逸脱行動と見なされやすい。
- ・ 「間違っはいけない」という刷り込みが、“問いの放棄”と“挑戦の回避”につながっている。

3. 教育制度と環境の硬直性

- ・ 「好奇心はあるのに、授業スタイルがそれを削いでいる」という声。
- ・ 日本の教育制度は、依然として“画一的な学びのスピード”に依存しており、特性のある子どもが「できない」と判断されやすい。
- ・ 一方で、国際的な学習環境（インターナショナルスクール等）では“会話力”や“自由な発想”が伸びる場面もあり、このギャップが学びの断絶を生んでいる。

4. 心理的な壁：羞恥心・自信の欠如・「無感覚化」

- ・ 「英語を話せないことが恥ずかしい」「質問することが怖い」といった自己否定感。
 - ・ さらに、「学ぶ必要性をそもそも感じていない」「学ぶ意味が見出せない」といった“無感覚化”も深刻な障壁である。
 - ・ 自分と違う世界に飛び込む勇気を削ぐ“心理的安全性の欠如”が、学びの出発点を奪っている。
-

これらの壁は、「誰にでもある」障壁であると同時に、社会全体で共有され、再設計されるべき課題である。壁の存在を可視化することは、その克服への第一歩となる。

【3】もし学びを武器にできたら、どんな未来が可能なのか？

“楽しい学び”が開く、希望と共創の社会ビジョン

もし誰もが「楽しい」と思える学びを自らの武器とし、日常に取り入れることができたなら——その先に広がるのは、単なる個人の成長ではなく、組織、地域、そして地球社会にまで及ぶ、ポジティブな変容である。参加者からは、理想を語りながらも、驚くほど現実的な未来像が多数示された。

以下に、4つのレイヤーに分けてその未来像を構想する。

1. 個人の未来：好奇心で生き、自分らしさを活かす人へ

- ・ 「自分らしく生きるとは、好きなことを深め、社会とつながること」
 - ・ 学びを“ライフの一部”とすることで、他人との比較ではなく、“昨日の自分”との対話が可能になる。
 - ・ 固定された職業像ではなく、「探究する人」「対話する人」「組み合わせる人」など多様なあり方が認められる。
-

2. 組織の未来：共に育つ“学習するコミュニティ”へ

- ・ 「教える人＝学ばない人」という時代は終わった。今や、組織も“学び続ける存在”でなければ変化に取り残される。
 - ・ 社員一人ひとりが自分の学びを語り合い、それをプロジェクトに還元するような文化。
 - ・ 競争よりも“学びのシェア”を重んじる、心理的安全性の高いチームが、最も強い組織になる。
-

3. 社会の未来：越境と共創があたりまえになる社会へ

- ・ 言語・年齢・立場を越えた対話が自然と生まれる環境。
 - ・ 英語やAIを駆使して、自分と異なる世界に接続する「越境の実践」が日常になる。
 - ・ 「話せなかったから出会えなかった人」「共通点がないと思っていた人」とも学びを通して出会えることで、孤立や分断が減少する。
-

4. 地球の未来：サステナブルで希望に満ちた文明へ

- ・ 人間らしい“問いと探究”の文化が、AI社会の補完軸として機能する。
- ・ 一人ひとりの小さな学びが、持続可能な地域づくりやグローバルな課題解決へとつながっていく。
- ・ 競争と消費の文明から、共創と循環の文明へとパラダイムが移行する鍵が「楽しい学び」である。

このような未来像は、決して理想論ではない。すでに一部では始まっており、学びの場が開かれるたびに確実に芽吹いている。個々の小さな“気づき”と“行動”が、社会の深部に波紋を広げていくのだ。

【4】この変化の激しい時代に、どうやって学ぶべきか？

“変化に飲まれない”ための学び方から、“変化を活かす”ための学び方へ

現代は、学びが“必要だからやる”ものから、“日々の選択と行動を支えるライフスキル”へと進化する時代である。変化の激しさに怯えるのではなく、変化を自分のリズムで取り込み、活かしていくためには、どのように学べばいいのか——参加者の言葉と実践から、以下のような戦略的アプローチが浮かび上がった。

1. 小さく・早く・続ける：マイクロラーニングの設計

- 毎日 15 分でもよい。“やらないよりやる”という「量より継続」が鍵。
- 短時間でもアウトプット（SNS 投稿、メモ、対話）とセットにすることで学びが深まる。
- 30 日スプリント方式など、「区切り」と「達成感」を組み込むと持続性が高まる。

2. 境界をなくす：学びのエコシステムを拡張する

- 学校／職場／家庭／地域／デジタル空間——学びを限定せず、すべての場に変換する。
- オンラインとリアルを自由に行き来し、さまざまな人・分野・視点と出会う「越境型学習」へ。
- 子どもから大人、高齢者、外国人までが交わる「ゆるやかに開かれた場」が未来の教室となる。

3. AI を“相棒”にする：問いのデザインとリフレクション支援

- ChatGPT などの生成 AI を「答えの提供者」ではなく、「思考のパートナー」として活用する。
- 自分がどんな問いを立てているかを観察し、自己理解を深める「メタ認知型ラーニング」へ。
- AI に問いを返してもらうことで、「問いの質」が自然と磨かれていく。

4. 学びの指標を変える：KPI から KLE（Key Learning Effect）へ

- 成績・資格より、「どれだけ変化を実感したか」「どれだけ人とつながれたか」を可視化する。
- 内省ジャーナル・ピアレビュー・学びの振り返り会など、学習プロセス自体を評価対象にする。
- 定量評価から“意味づけ”中心の定性評価へシフトすることが、真の成長につながる。

5. 倫理と包摂性を内在化する：責任ある学習設計へ

- AI 活用・情報発信・共学のプロセスにおいて、他者や社会へのインパクトを意識する。
- 特定の属性に閉じない学びの場を設計し、「学びやすい人だけが得をする」構造を見直す。
- とくに教育格差・障がい・地域差への配慮を含んだデザインこそ、サステナブルな学びの基盤となる。

この STEP では、「何を学ぶか」以上に「どう学ぶか」「どんな設計で続けるか」が重要であることが明らかになった。未来は準備された者に訪れるのではない。“学び続ける習慣を持った者”に自然と拓かれるのである。

【5】そしてどこから始めるか？

“楽しい”を起点に、自分らしい学びを一步步動かすために

ここまでで、現代において必要とされる学びの本質、障壁、可能性、戦略的な方法論を見てきた。だがどれほど深い洞察が得られても、最初の一步が踏み出せなければ意味をなさない。STEP5 では、“どこから”そして“どうやって”始めるかについて、現実的かつ感情に寄り添った形で提案する。

以下に示すのは、「楽しい」を出発点としながら、誰でもすぐに始められる 6 つの具体的な行動である。

1. ときめきリストの作成：感情を学びのコンパスにする

- まずは、最近「時間を忘れた瞬間」を 3 つ書き出してみる。
- それが映画でも、人との会話でも、自然の中でもよい。
- 感情の動きこそが、学びたい方向を教えてくれる最も確かな“羅針盤”である。

2. 30 日スプリント学習：習慣と達成感を育てる

- 興味あるテーマをひとつ決め、毎日 15 分、調べたり書いたり対話したりする。
- たとえば AI、英語、デザイン、歴史、子育て——テーマはなんでも構わない。
- 小さくても「毎日続けること」こそが、自己肯定感と自己効力感を生む。

3. ピア・ラーニングの約束：人とのつながりを学びの推進力に

- 異なる背景を持つ相手と週 1 回、学びについて雑談・共有する。
- 「何を讀んだか」ではなく「何を感じたか」「何を変えたか」を話すと深まる。
- 共に学ぶ仲間がいると、学びが続くだけでなく、世界の見え方が変わる。

4. 失敗ジャーナルをつける：違和感やミスを“資産”に変える

- 「うまくいかなかったこと」「ちょっと引かかったこと」を記録する。
- 習慣化すれば、自分の学びのパターンと限界を見つける鏡になる。
- 「失敗を語れる人」は、他者との共感を生む“ストーリーテラー”でもある。

5. 越境参加：知らない世界に一步踏み出す

- 勉強会、オンラインサロン、オープンイベント——自分とは異なる領域の場に顔を出してみる。
 - 「話せなくてもいい」「聞くだけでもいい」と思える空間が、次のステップへの足がかりになる。
 - 重要なのは、完璧を目指さず“関わりしろ”をつくること。
-

6. Teach-back（教え返し）：学びを言葉にして定着させる

- 学んだことを誰かに伝えてみる。「こんなことを考えた」と3分話すだけでも十分。
- 教えることで思考が整理され、「自分は何を大事にしているのか」に気づくことができる。
- 家庭・職場・地域など、身近な人との共有こそが“学びを社会化”する入口となる。

大事なメッセージ

「学びは情報収集ではなく、人生のリズムをつくる技法です。」

「小さな楽しさは、大きな変化の原点です。」

「AI も、他人も、環境も、すべてはあなたの問いに応えてくれます。」

「『どうせ…』を『だったら…』に変える日々が、未来を変えていきます。」

【6】さいごに：「楽しい学び」は義務ではなく、未来への権利である

このワークショップを通じて私たちは、「これからの時代を一人ひとりが“楽しく”生きるための学び方」とは何かを、理論や制度の話ではなく、現場での声と実感から掘り下げてきた。

その中で明らかになったのは、学びとは「誰かのためにさせられるもの」ではなく、「自分自身を世界とつなげ、自分を生きるための力」だということだ。

変化が激しく、AI やグローバル化が進む時代において、学びの価値はますます高まっている。だがそれは、学校の成績や資格といった形式的な評価のためではない。

むしろ今必要なのは、自分の“好奇心”と“違和感”を手がかりに、「自分が何を大切にしたいのか」を言葉にし、それを仲間と共に深めながら歩いていくような、自律的かつ共創的な学びである。

そこでは、AI も、他者も、自然も、すべてが“学びのパートナー”になり得る。私たちはもはや、孤独に学ぶ必要はない。

そして、どんな壁があったとしても、「小さな一歩を踏み出すこと」が未来を変える最も確かな手段である。

その一歩を、“楽しい”という感情から始めることができたとき、学びは努力や義務ではなく、自由と喜びに変わる。

学ぶことは、生きること。

あなたの「問い」が、あなた自身を、そして社会を進化させる。